

「3・11いわて教会ネットワーク」ニュース

Vol.28 2015/7/26

被災地の大きな変化の中で

大塩梨奈（大船渡地区担当スタッフ）



写真左が大塩梨奈スタッフ



現在の大船渡



震災から4年が経ち、大船渡、陸前高田はどのような状態かと聞かれます。

この時期は、沿岸どこも同じだとは思いますが、災害公営住宅があちらこちらで建てられています。住宅の完成は今年度がピークを迎えます。大船渡駅前も土を盛り上げていますが、その土は瓦礫を粉砕したもので、風の強い日には瓦礫の臭いがそのあたりに漂います。自宅再建する人は住宅には入れません。山側の仮設に住むある方は仮設からまだ引っ越しすることができません。それは、彼女の土地に仮設が建っているからです。仮設のみんなが出てからでないと自分の家を建てることができないので、みんなを送り出す側になってしまい、それも寂しいことだと話しておられました。

また、大船渡には陸前高田出身の方も多くいます。大船渡の仮設に入っておられるある男性は、高田の住宅にもう入れるのですが、まだ引っ越さずに仮設にいます。その理由は、高田のその住宅の周りにはまだ何もなく、歩いて行ける距離にはお店もなく、車がないと不便だからです。また4年間一緒に暮らした仮設というコミュニティーから出て行くと、また新しいコミュニティーになれるのが大変だという方も多いです。

大船渡では、各仮設に支援員制度を取り入れています。災害公営住宅にも支援員配置についての案が出ています。仮設と比較して住宅になると孤立や引きこもりが増すと予測されているからです。入居者の努力だけで新しいコミュニティーを築くのは難しい面があります。

住宅ではご近所さんがわりと近くですが、住宅地に新しく家を建てる方もまた別の話です。息子さん家族が高台に家を建てたあるおばーちゃんは、仮設からは歩いて行ける距離ではなく、今までのように談話室でみんなと会うことができません。引っ越すと日中は1人になってしまうのです。「仮設で死ななくて良かったけど、誰にも会えなくなるのは、寂しい。やんた。」と言っておられました。

震災前、沿岸には大きな家が多かったです。4世代一緒に住んでいたような生活です。収入はみんな多い方とは言えないのですが、家族みんなが稼ぎに行き、おじいちゃん、おばあちゃんも浜に手伝いに行き、稼いだりして支え合っていました。多くの人たちはもう一度、あの大きな家に住みたいと言います。それは、それは物質的な大きさを求めているというより、みんなで住んでいたコミュニティーを懐かしがっているのです。

（次ページに続く）

(前ページの続き)

4年が経って、多くの人たちは津波のことを普通に話し、過去のこととして受け入れています。でも、ある方は、時が経ち、そのことを思い出したら悔しさが増す。何で生きているのかわからない、希望がない、と言っていました。神さまにあって希望を持っている私でしたが、「神さまが希望」だと言っても、その言葉が実に薄っぺらく感じてしまいました。まるでヤコブの手紙にあるように、着る物もなく、食べ物もない人に向かって、「安心して行きなさい。暖かになり、十分に食べなさい」と言いながらも、必要なものを与えないような。口先だけのよう。人の悲しみに寄り添え切れない辛さを感じました。ゆっくりと、その方とも時間を過ごして行きたいと思いません。

私が個人的に関わっている80歳のおばーちゃんがありますが、その方は、最近、ご主人を亡くされた方です。住んでいる仮設は山の中なので、ひとりで出かけるのも大変なことです。バスは一日四本。バス停に行くのにも、坂を上らないといけません。買い物をしても重い物を運べません。そんな彼女の所に毎週、訪問するようにしています。そして、病院や買い物、市役所など運転して連れて行っています。いつも、胃がもたれる程の食べ物でもてなしてくれますが、普段は独りだと作らないし、食べたくもないと言います。「一緒に食べると、んめなあ」と一緒に食べます。

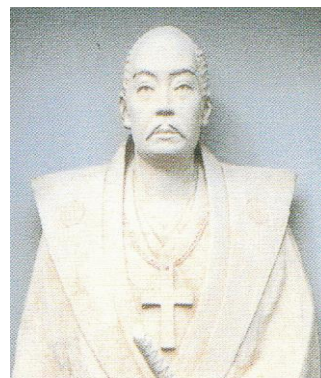
まずは隣人になること。それが絶えず思い起こされます。支援者として、あれを、これをしてあげよう、ではなくて、ただ相手の存在を喜び、時間を共有していくこと。難しいこともあります。でも、彼らと共にいることが嬉しいです。「ことばは人となって彼らの間に住まわれた」ということを覚えてイエスさまの足跡を辿り、ただ彼らを愛していきたいです。

岩手における教会ネットワークの歴史1 若井和生

東日本大震災以後、ネットワークということばが盛んに語られるようになりました。教会間のつながりの豊かさを経験で教えられてきた日々だったと思います。ただし教会がネットワークの恵みを覚えさせられたのは今回が初めてではありません。「ネットワーク」ということばこそありませんでしたが、この地における神の国の到来は、まさに教会間のつながりを通してこの地に到来してきました。岩手でも同様です。

今から約400年前、江戸幕府の厳しい迫害を逃れるために、西国から逃れてきた多くのキリシタンたちが、東北各地の鉱山などに潜伏し、コンフラリアという共同体を形成して宣教のわざに励みました。迫害が当然という当時の世の中であって現地の多くの人々が回心に導かれ、信仰の道を志しました。カルバリヨ、アンジェラスと言った神父たちが、変装をしたり暗号を駆使したりして、いのちがけで彼らを訪ね歩き、励ましました。各地に潜伏していたキリシタンたちですが決して孤立していたわけではなく、彼らを結ぶ「ネットワーク」が存在していたことがわかります。

そのような東北全体に広がる信仰のネットワークを支えていたのが、当時、水沢近辺の福原を治めていたキリシタン領主・後藤寿庵でした。神父たちはまず福原にやって来て、福原を拠点として、各地に広がるネットワークをたどりながら東北各地や松前（北海道）を巡り歩きました。当時の信仰者の多くはその後、殉教していきます。厳しい弾圧の中であって互いに助け合い、祈り合い、天国を望み合う、熱い信仰のネットワークでした。



水沢カトリック教会の
後藤寿庵像

日本同盟基督教団の 「東北宣教プロジェクト」が始動

日本同盟基督教団は東日本大震災後、150ものボランティアチームを教団を挙げて被災地に送り続けて下さいました。それら積み重ねられた取り組みと祈りの中で、被災地に対する継続的な宣教の重荷が与えられ、「東北宣教プロジェクト」がこの4月より始動することに。このプロジェクトの派遣教師として神学校を卒業されたばかりの齋藤満先生一家が岩手に遣わされてきました。現在、三陸沿岸での本格的な宣教に向けて準備が進められています。



4月21日 齋藤満先生就任！

第二期インパクトチームの働きが7月で終了

ドイツでは、高校を卒業したばかりの若者たちに一年間のボランティア活動を経験させることが奨励されているそうです。インパクトチームの5人の若者たち（ダニエル、ヨハネス、マリアネ、マリヤ、アニタ）がその制度を利用し、リーベンゼラ宣教団を通して岩手に遣わされて来たのは昨年9月のことでした。それ以後の約10ヶ月、気仙沼や陸前高田の約15もの仮設住宅を定期的に訪問し、被災地の方々の友となって下さいました。

ドイツのケーキやコーヒーとともに笑顔で接してくれる彼らのもてなしに、被災地の方々がどれだけ慰められたことでしょうか。「北国の春」や「故郷」など日本の歌もたくさん覚えました。そしてたくさんの方々の賛美歌を歌って下さいました。

彼らは7月にドイツに帰国し、それぞれ大学や神学校に入学します。被災地で人々に仕えた経験が、それぞれの今後の人生の中で、豊かに用いられますよう、お祈りしたいと思います。



気仙沼の仮設集会所で「北国の春」を歌うインパクトチームの皆さん



ダニエル君のギターには被災地の方々のたくさんのサインが記されました。

4～6月に支援に駆けつけて下さった教会・団体

オーストラリアチーム、香港チーム、シンガポールE P J Mチーム、オーストラリア高校生チーム、ニューソング教会祈りのチーム、久慈教会チーム、希望の丘キリスト教会、青森福音キリスト教会、

アメリカ JIBC チーム、四国チーム、スウェーデン学生チーム、前橋キリスト教会
山形小羊チャペル、湘南グレースチャペル、インパクトチーム、盛岡月が丘キリスト教会、

宮古コミュニティ・チャーチ、盛岡聖書バプテスト教会、盛岡みなみ教会、

北上聖書バプテスト教会、水沢聖書バプテスト教会

(その他、個人で駆けつけご奉仕下さった方々が多くおられます。)

三陸 星野富弘 花の詩画展の

祝福のためにお祈り下さい！

星野富弘さんの詩画展が大船渡で開かれると聞いた一人の婦人の方が「鳥肌が立つほど嬉しい」と語られました。その方は、以前より富弘さんの作品の大ファンでしたが、大震災でご自宅が床上浸水し、持っておられた富弘さんの詩画集は全て流されてしまいました。しかし気落ちしていた彼女のもとに、教会から被災地支援スタッフによって届けられたのが、いのちのことば社が被災地のために寄贈して下さった星野さんの詩画集、「いのちよりたいせつなもの」でした。彼女のように、今秋の詩画展の開催を楽しみに待ち望んでいる方々が多くおられます。

被災の苦しみや悲しみがどれほど大きなものかは、私たちの想像を超えています。3～4年後の落ち込みは、直後よりも更に深いと専門家によっても指摘されています。表面的には「復興」に向かっているように思えても、心の中は逆にますます落ち込んでい

も見聞きします。

来る2015年9月19～26日、大船渡市のリアスホールを会場に「三陸・星野富弘・花の詩画展」を開催します。町も個人も様々な変化の中に置かれ続けていますが、生きること、生かされていることの意味と喜びを花の詩画に込めて描き続けて来た星野富弘さんの思いと信仰を、この度、大船渡にとどまらず、岩手県（～宮城県）三陸一帯の皆様幅広くお届けしたいと思い、準備を進めております。

少しでも多くの方々に来場していただきたいと思い、入場料は無料とすることにいたしました。しかし、開催には約350万円の費用が掛かります。幸いなことに既に約50万円の寄付・献金があり、動き始めておりますが、残り約300万円の必要があります。

「被災地を忘れない！」との思いを、今回、富弘展開催のための寄付という形で表していただければ感謝です。どうぞよろしく願いいたします。

三陸・星野富弘・花の詩画展を開く会
実行委員長 近藤 愛哉

【ゆうちょ銀行】

店名：八三八（読み ハチサンハチ）

店番：838

預金種目：普通預金

口座番号：2157858

口座名：さんりく星野富弘花の詩画展を開く会

ご協力を宜しくお願い致します。



TOMIHIRO HOSHINO
Exhibition of flowers poetry & paintings



2015.9.19(土)～26(土) 大船渡市・リアスホール

午前9時～午後6時

ただし22日火曜日は休館

26日(土)は午後5時閉館

入場無料

主催：三陸 星野富弘 花の詩画展を開く会 共催：大船渡市
協賛：大船渡市教育委員会、大船渡市生涯学習協議会、一宮町 生涯学習委員会、釜石市教育委員会、宮古市教育委員会、山田町教育委員会、
陸奥高田町教育委員会、OCC-弘光法経キリスト看護協会/DRUChel、(株)東海新聞社
協賛：新報東北ネットワーク/ミッションあらかち、さかみはら市民クリスマス、(財)太平洋放送協会、クリスマスチャン新聞
特別協力：東北放送
協力：311いわて教会ネットワーク、(公財)国際開発振興財団・FPIJ、
宮城県被災地復興基金プロジェクト(株)創風社、(株)宇都宮マツダ、(株)アリア・アーツ(株)、いのちのことば社